

川勝平太 著

『文明の海洋史観』（中央公論社、1997年）

近藤喜重郎

・日英比較経済史から生まれた海洋文明論

本書は、文明論の中でも、早稲田の学統に則ったものである。幅広い視座をもち、その独創性は、第8回読売論壇賞の受賞をもたらした。論壇賞発表に際し、本書の序が『This is 読売』1998年5月号に掲載された。その始めにあるように、本書の独創性は、「近代はアジアの海から誕生した。より正確に言えば、海洋アジアからのインパクトに対するレスポンスとして、日本とヨーロッパに新しい文明が誕生した」というテーゼにある。そしてまた、これが『海洋史観』の所以である。その意味で、本書は、東大の唯物史観と京大の生態史観、トインビーの文明論を、陸地中心史観と一括し、これを補完する新たな文明史観を提唱したといえる。

著者の専門は、比較経済史である。本書で再現される比較文明史では、日本と欧州の経済的發展に関する論述が中心にある一方で、思想的（本著ではエートスと呼んでいる）発達との密接な関連が他方で分かりやすく展開する。著者は、イギリスにおける経済発達と日本におけるそれとを比較検討した結果、15-16世紀まで日本とヨーロッパが共に海洋アジアとの貿易に依存していたという共通性を見出しただけでなく、両者がそれぞれ世界に先駆けて近代化し、旧文明にとって変わる新文明の担い手となったというもう一つの共通性は、時代的に先行するこの共通性から生じているという本書の幅広い視座を生んだ。

しかし、著者の主要な関心は、ヨーロッパと日本の共通性より、相違性にあったようである。つまり、一方でヨーロッパは経済活動を世界に拡大し、他方で日本は自国内に集約（鎖国）したことに著者は関心を持った。両者の相違点の背景には、前者がアメリカとアフリカに物資の購買先を見出したのに対し、後者は国内に見出したことがあげられる。その結果、前者は、経済的に資本集約・労働節約型の産業革命を遂げ、後者は資本節約・労働集約型の勤勉革命を遂げた。生産性に注目した、このような類の論述に対しては、村上泰亮氏の『文明の他系史観』（中央公論社）が、一定の妥当性を認めつつ、これを批判している。

また、著者は、それぞれの文明に対する異文明からの世界観の影響は、後に、両者の間に対極的な相違点を生んだという。ヨーロッパにはイスラムの「戦争と平和」的世界観が、軍拡に帰結する歴史をもたらしたのに対して、日本では、中国の「野蛮と文明」的世界観が、江戸時代に鉄砲から刀へという軍縮をもたらしたというのである。このような論述は、軍縮が緊急課題である現在、関心を集めるものであろう。

・海洋史観で診た日本文明論

さらに、本書は、海洋史観から診た日本文明論を展開する。海に着目した海洋史観は、これ

まで世界を席卷し続けてきた大西洋を中心とした、いわば「環大西洋文明」や、太平洋を取り囲む国々が形成する、いわば「環太平洋文明」、また「環インド洋文明」といった観念を生み、そして、日本文明は、これらの枠組みの中で論じられるのである。日本は、太平洋に浮かぶ島々（南北アメリカもこれに含まれている）の一つとして、それらとの結び付きを、特に南方の国々との関係を深めていくべきだと著者はいう。このような「太平洋文明」における日本の位置づけは、ブローデルを参考にしつつ、独自の見解を展開させる入江隆則氏の『太平洋文明の興亡』（PHP）とも、テーマを共有する。

その上で、日本は、その自然の生態系の多様性を日々の国民生活に取り入れることで、国土全体を「庭園」とし、これをもって世界における日本のアイデンティティーとすべきだと著者はいう。この「庭園」を、かつて、日本を眺めたイギリス人たちは、自分達が失ったものと評したこともあり、この日本独特の景観を今一度再評価すべきであると著者は提唱する。

また、著者は、梅棹氏との対談で、日本は、生態系の宝庫であるだけでなく、「文明の百貨店」であるともいう。日本は、歴史上、中国、ヨーロッパ、アメリカの文明の影響を被ってきた。そして、それぞれの文明は、インド、イスラムの文明の影響を被っている。そうであるならば、日本は、これらすべての文明の影響を被っており、従って、それらを一個所に同時に展示、あるいは提供することができるというわけである。実際に対談で「百貨店」と評したのは梅棹氏であり、著者は「博物館」といった。この対談は、『文芸春秋』1998年8月号に掲載された。

#### ・総括

このような対談があるように、文明の海洋史観は、生態史観に基づいてこれに続くものであり、これらの文明史観は、人類史において自然の果たした役割が基本にある。従って、本書では、日本文明もヨーロッパ文明もこうした視点から検討されるが、ここでは言及するに留めておく。この問題に関連して、特にヨーロッパを扱った『ヨーロッパ帝国主義の謎』（アルフレッド・クロスビー著、佐々木昭夫訳、岩波書店1998年4月）が、本年6月に朝日新聞の書評に載った。これは、生物相から診た歴史観を提示している点で本書と共通し、興味深い。

以上紹介してきたように、独創的な文明史観、数百年という長期的な過程の考察、東西文明の比較という幅広い視座をもち、さらにそれらに基づく独特の日本文明論を展開しつつ、他の様々な著書にもある同時代的問題を積極的に、また大胆に取り入れてある本書は、今きわめてホットな書物であるということができよう。なお、ここにあげた一連の文献は、松本富士男教授に御教示いただいたものである。